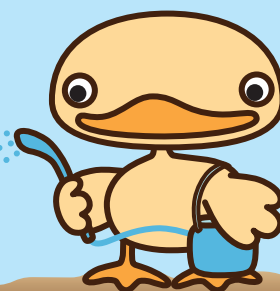


新しい病害虫 Vol.14

近年、野菜や花き類、それらの種苗などの海外からの輸入や国内での移動が大幅に増加し、それに伴って新たな病害虫が本県に侵入、発生するリスクが高くなっています。新たに発生した病害虫は、既存の病害虫との見分け方が難しかったり、効果的な登録農薬がないなど、防除に苦慮するケースが多く見られます。

新たに発生した病害虫の防除対策に役立つよう、見分け方や防除対策などについて紹介します。

フタテンミドリヒメヨコバイ
ビワキジラミ
トマトキバガ
ニラフシダニ（仮称）
トマト黄化病（ToCV）
ミョウガ葉鞘褐色腐敗病（仮称）



フタテンミドリヒメヨコバイ

Amrasca biguttula (Ishida, 1913)

令和3年度特殊報第1号

発生作物：ナス

形態、生態など

成虫の体長は2.7～3.2mm。複眼は白色、頭胸部は黄緑色、上翅は半透明白色で翅の末端に一对の黒点がある(写真1)。終齢幼虫の体長は2.4～3.2mm。全身がほぼ黄緑色で複眼は白色(写真2)。

雌成虫は、葉脈に黄白色の卵を一度に15個ほど産卵する。卵は4～11日で孵化し、幼虫期間は7～21日、成虫の寿命は35～50日である。本種はナスの他に、オクラやハイビスカスで発生が確認されている。

被害

幼虫・成虫ともに新葉や茎を吸汁加害する。葉は黄化・奇形化し生育が抑制される(写真3)。

防除対策

- (1) 成虫の侵入を防ぐために、開口部に目合い2mm以下の防虫ネットを設置する。
- (2) 本種の発生が見られるほ場では農薬による防除を行う。
- (3) 栽培終了時には、近隣の作物へ本種が移動しないように、残渣処理の前に蒸し込み処理を実施する。



写真1：成虫



写真2：幼虫



写真3：本種の吸汁加害による葉の黄化、奇形化

高知県病害虫防除所（高知県農業技術センター生産環境課発生予察担当）

〒783-0023 高知県南国市廿枝 1100 / TEL:088-863-1132 / FAX:088-863-7470

URL : <https://www.nogyo.tosa.pref.kochi.lg.jp/?sid=2016>

E-mail:160506@ken.pref.kochi.lg.jp

令和7年3月作成

ビワキジラミ

Cacopsylla biwa

令和5年度特殊報第1号

発生物物： ビワ

形態、生態など

成虫の体長は2.5～3.5mm程度、体は黄褐色～暗褐色で、多数の白色斑紋がある(写真4)。幼虫は体長2mm程度で体に褐色のまだら模様があり、体の左右に褐色の翅芽(翅のもと)が飛び出ている(写真5)。

本種が寄生・増殖できる植物はビワのみである。春先に花や幼果、新芽で増殖し、ビワ果実が肥大・成熟する5～6月頃に多発生する。盛夏期には休眠状態となり、葉上にはほとんど見られなくなるが、9月以降に活動を再開し、枝先に集まって交尾し花蕾に産卵する。冬期に休眠することではなく、ビワ樹上で越冬する。

被害

幼虫・成虫ともにビワの樹液を吸汁する。幼虫は甘露や白い綿状のろう物質を排出し、果実や枝葉を汚損する(写真6)。被害がひどくなると、果実が腐敗・落下する。

防除対策

- (1) 樹を観察し、果実や新梢のすす病やろう物質の付着、葉裏の成虫の寄生を目印に、本種の早期発見に努める。成虫は黄色に誘引されるため、黄色粘着トラップによるモニタリングが有効である。
- (2) 農薬による防除は、収穫終了後から7月中旬(夏期休眠前)、11月以降(摘蕾後)、3月(果実袋かけ前)に実施する。また、新たに苗木を導入する場合には、定植前に農薬による防除を実施し園地への持ち込みを防ぐ。幼虫は花房の基部などの狭い隙間に潜んでいるため、薬液が十分かかるよう、ビワ樹全体に丁寧に散布する。



写真4: 成虫は小さなセミのように見える

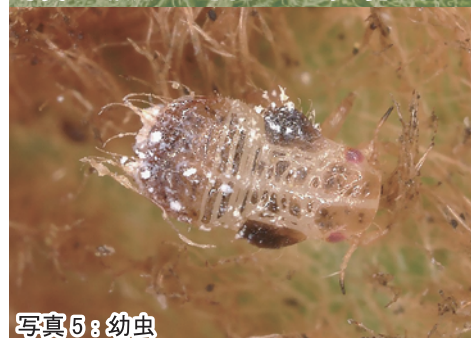


写真5: 幼虫



写真6: 白いう物質が付着した果実とすす被害

トマトキバガ

Tuta absoluta (Meyrick)

令和5年度特殊報第2号

発生物物： トマト

形態、生態など

成虫の体長は5～7mm。頭部にはキバガの特徴である、牙状に発達した下唇髭が見られる(写真7)。終齢幼虫の体長は約8mm、体色は淡緑色～淡赤白色で、頭部は淡褐色、前胸の背面後縁に狭い黒色横帯を有する(写真8)。

本種は南アメリカ原産で、繁殖力が高く年に10～12世代発生する地域もある。雌は一生のうちに平均約260個の卵を葉裏などに産み付ける。主要な寄主植物はトマト、ピーマンなどのナス科植物であるが、マメ科のインゲンマメも寄主植物として確認されている。

成虫は飛翔により数km移動し、風に乗ってさらに長距離の移動も可能である。また、寄主植物の苗等の移動に伴い拡散することも考えられる。



写真7: 成虫



写真8: 幼虫



写真9: 表面の薄皮を残して食害する

被害

トマトでは、葉の内部に幼虫が潜り込んで食害する(写真9)。果実では、幼虫が穿孔侵入して内部を食害するため、果実表面に数mm程度の穿孔痕と食害部分の腐敗が生じ、果実品質が著しく低下する(写真10)。

防除対策

- (1) ほ場内をよく見回り、早期発見に努める。被害葉や被害果はほ場から持ち出し、野外に放置せずに土中深くに埋却するか、ビニル袋に入れて一定期間密閉し成幼虫を死滅させるなど、適切に処分する。
- (2) 薬剤防除にあたっては、抵抗性の発達を防ぐため、同一系統の薬剤の連用は避ける。



写真10: 被害果(熊本県病害虫防除所提供)

ニラフシダニ(仮称)

Aceria sp.

令和5年度特殊報第3号

発生作物： ニラ

形態、生態など

成虫は体長0.2mm程度で白色または淡黄色、半透明のうじむし型で、肉眼での観察は困難である(写真11、12)。

本種はフシダニ科 *Aceria* 属に属するダニで、新種と見られるため生態は不明である。

被害

葉縁や葉身に水疱状の突起が形成され、触ると凸凹の隆起が確認できる(写真13)。症状が進むと葉が湾曲、奇形化する(写真14)。

防除対策

- (1) 令和7年2月現在、本種に登録のある農薬はないので、本種の被害が確認された場合は速やかに株ごと除去する。掘り取った株は肥料袋等に入れて一定期間密封し株を腐敗させた後に埋却するなど、完全に殺虫してから処分する。
- (2) 発生ほ場では、管理作業中に手や農機具などに本種が付着して拡散するおそれがあるので、作業後しっかり洗浄する。
- (3) ほ場周辺の野良生えニラは本種の発生源となり得るので除去する。



写真11: 成虫

0.1mm

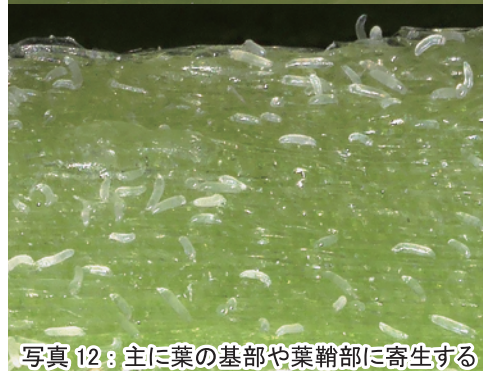


写真12: 主に葉の基部や葉鞘部に寄生する

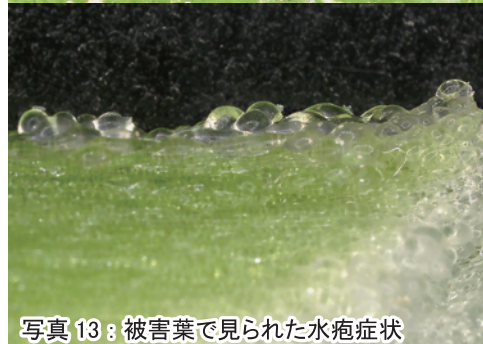
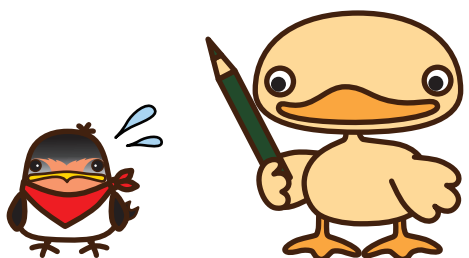


写真13: 被害葉で見られた水疱症状



写真14: 湾曲、奇形化した葉



トマト黄化病

ToCV(トマト退緑ウイルス)

令和6年度特殊報第1号

媒介虫：タバココナジラミ、オンシツコナジラミ
発生作物：トマト

病徴

下位葉から上位葉に向かって症状が進展する。発病初期には葉脈間が退緑、黄化する。症状が進むと葉全体が黄化し、紫褐色のえそ症状が現れる(写真15～17)。本病の症状は苦土欠乏症に酷似しており、判別は難しい。罹病株は果実が小玉化し、収量が減少する傾向が見られる。

防除対策

本病はコナジラミ類によって媒介されるため、基本的な防除対策はトマト黄化葉巻病の対策と同様である。

- (1) 発病株は伝染源となるので直ちに抜き取り、ポリ袋等に入れて密閉し、ほ場外に持ち出して埋却するなど適切に処分する。
- (2) コナジラミ類の侵入を防ぐため、施設の開口部に目合い0.4mm以下の防虫ネットを展張する。黄色粘着トラップの設置等により、媒介虫の早期発見、早期防除に努める。薬剤防除にあたっては、抵抗性の発達を防ぐため、同一系統の薬剤の連用は避ける。栽培終了時には施設の蒸し込みを行いコナジラミ類を死滅させる。



写真15: 下位葉の黄化症状

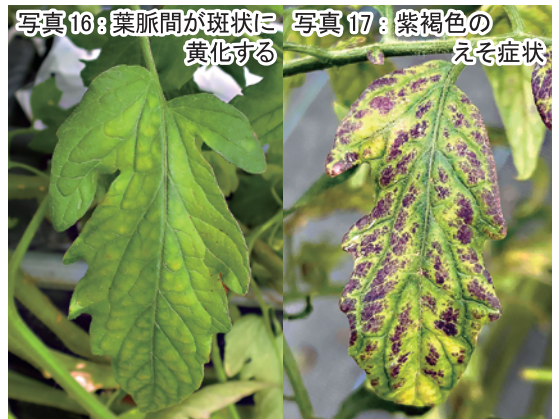


写真16: 葉脈間に斑状に黄化する

写真17: 紫褐色のえそ症状

ミョウガ葉鞘褐色腐敗病(仮称)

Musidium stromaticum

令和6年度特殊報第2号

発生作物：ミョウガ

病徴

初めに葉鞘の下部が褐変、その後徐々に葉鞘内部に腐敗が進行し、ひどい場合には枯死する(写真18)。種根茎の芽出し処理時に新芽での発病が確認されている(写真19)ことから、罹病根茎が伝染源の一つと考えられる。花穂での発生は確認されていない。

防除対策

- (1) 種根茎には病徴のないものを使用する。
- (2) 令和7年2月現在、本病に対する登録農薬はない。植物防疫法第29条第1項に基づく措置により使用できる農薬の情報については高知県病害虫防除所ホームページを確認すること。



写真18: 葉鞘の褐変腐敗症状
褐変した葉鞘(左)、褐変症状が進行(中)、枯死に至る(右)。



写真19: 新芽の褐変腐敗症状(左)と健全な芽(右)

病害虫防除所では、
農作物の病害虫や防除対策、農薬に関する
最新情報を提供しています。